南十字星の下・草むす屍に禱る

兵庫県　藤原義光

私は現在、元気で兵庫県姫路市の、憲法の下・国の護りに尽力されている陸上自衛隊の第三師団姫路駐屯地・第三特科連隊の東門前にて、老夫婦で寄り添いながら、たばこ店を商い余生を送っています。

向かいの自衛隊の、朝な夕なの喇叭や号令の音が、私の若き日の軍隊の諸々のことを夢か幻かと想い起こさせてくれます。私自身は忘れ去りたい、されど、忘れてはならない。次代の人々に戦闘の悲惨さや残酷さと云う事を語り伝える義務があると思う。

私は福岡県の大牟田で生まれました。父は三井鉱業株式会社に勤務していて、両親と妹の四人家族でした。その当時は、世間様同様で可もなく、不可もなくの生活状況でした。学業を修了した後、人生勉強として種々の職業を学びました。

昭和十四（一九三九）年夏・徴兵検査においては甲種合格を申し渡され、俺も一人前の男だと嬉しく感じました。しかし両親のことを思えば、戦地に出征して、万に一つのことを考えれば喜んでばかりいられないと思いました。

その年の十二月一日に福岡県久留米の野砲兵第二十四連隊留守隊へ入隊せよとの令状がきました。

平田連隊長の訓示は「貴君達の五体に流れる脈々たる血潮は、彼の蒙古来襲の砌（みぎり）、第一陣として活躍致せし先祖の血潮と同じである。今、国家の干城として入隊したからには、先祖や郷土の名に恥じぬごとく活躍されん事を望む」というものでした。

初年兵教育は非常に厳しく、寒風の吹き荒れる

中を教育係から活をいれられました。「貴様達は現役兵だ、九州男子は帝国軍人の範と成るごとく国難に殉じ、刻苦勉励、切磋琢磨せよ」でした。そして第一番に大きな声を出すことでした。それで毎夜、点呼後に営庭に整列し、力いっぱい大きな声で叫ぶのです。自分は子供のころから、何事をしても、少しおとなしく、友達の後からついて行くような、一面気が弱い子供でした。それが率先して喉から血がでるような叫び声を出すのです。覚悟を決めて、半ば狂乱のごとく毎日の軍務に服しました。

厳寒の二月末でした、部隊長から出動命令が出たと申し渡されました。軍装品が全部新品である。帽子から軍靴まで、勿論シャツ（襦袢）パッチ（袴下）から靴下、テトウ（手袋）まで、すべて皆夏衣料でした。

昭和十五年三月一日出動です。南支那方面軍隷下第十八師団（秘匿号菊兵団）山砲第十八連隊編入転属との事です。目的地は中国南部広東省黄埔とのこと。七〇〇〇トン級の大型輸送船に乗船、海軍の艦艇が前になり後になり付いて警戒護衛してくれていました。隠密行動とのことでしたが、頼もしい限りでした。

なお同郷の先輩師団第十二師団は剣兵団で、当時満州に進駐していました。第十八師団は菊兵団で歩兵第五十五連隊（大村）、歩兵第五十六連隊（久留米）、歩兵第百十四連隊（小倉）その他騎兵、砲兵、工兵、輜重兵と通信、衛生等々の編成で、菊兵団も出陣時には総勢一万数千人だったと聴きました。また戦地に在っては、増加・救援等で兵員が増加して時には一万五千人位になることもあるとのことでした。

そして同年二月から黄埔の山砲第十八連隊にて勤務することとなりました。現地教育は並行して諸警備・警戒等々の任務があり、俗に云う初年兵教育として特別の教科もなく、常に実戦が即教育訓練でした。分隊は勿論、小隊、中隊に至るまで

全員が一心同体のごとく協力し援護して勤務に勉励しました。連隊長も途中で高須中佐に代わられました。最後の時は江口大佐でした。どの部隊長も皆、部下思いの良き上官でした。

勿論、中隊長も同様に立派な方たちで、自分は幸せ者でした。

山砲連隊は三個小隊があり、各々山砲一門を保有し、徒歩小隊（歩兵小隊）は各小隊に一分隊を配し、部隊本部に指揮班があり、指揮命令・通信連絡並びに中隊長直轄の弾列（糧秣・弾薬等輸送）、自動車及び軍馬も数頭いました。そして本来の任務である山砲には射手・観測・弾薬手がつき一門の砲を発射するためにはいかに多くの兵員を必要とし、各々の協力によって最大の戦果を挙げることができるのです。また付近の守備・警戒のためには一個分隊の小銃・機関銃手等々もおりました。

昭和十六年十二月、駐留地を出発しました。漏洩厳禁で隠密行動での行軍でした。十二月八日、マレー半島コタバルに敵前上陸でした。何の抵抗もなく無血上陸でした。そして英軍の東洋における最大の拠点基地である「シンガポール」に向かって南進しました。

大東亜戦争開戦日より二カ月遅れの昭和十七年二月八日・ジョホール水道を敵前渡河して、二月十日にはシンガポールのテンガ飛行場を占領し、引き続きシンガポールへ入城しました。なおこの時点で敵のルイス式水冷機関銃（一三・七ミリ）二銃及びチェッコ機銃を一銃を捕獲しました。この機銃が後日大変威力を発揮しました。この機銃には高射脚が付いていました。

二月十五日、我が部隊はシンガポールへ入城しました。友軍が多大の犠牲者を出して、「東洋一の要塞」と豪語していたブキテマ高地を攻略せしとのこと。散華の聖霊に黙禱を捧げました。続いてクルアン地区の警備に任じました。この頃より

「ビルマ戦線」は熾烈を極め、ケタパンの戦闘では英印軍に加えて米支軍も北方より進撃し、至る所で日本軍の敗色は濃くなりました。マンダレーから緬支国境作戦のすべてが失敗の連続でした。

昭和十九年の六月だったと記憶します。「モーニン」と云う所にて敵機の激襲を受けました。ここでは数日来、全員が休養を摂って英気を養っていましたので、「スハ！　敵襲」にも動せず、友軍の高射機関砲とシンガポールにて捕獲した「チェコ機銃」、英軍の「ルイス式水冷十三・七ミリ機銃二機」等々で対地空戦を展開しました。現在までに多数の戦友を失ったのだ。現状では生命の保障は皆無だ。全員死に物狂いで防戦しました。

敵機は「ホーカーハリケン」「カーチスホーク」「スビットハイヤー」「グラマン」「ロッキード」等々英・米軍の優秀機でした。敵機は五百メートル程前方にて機体を倒しながら急降下して来ました。我々はその機体を斜めに傾けたところを狙い打ちしました。これは見事に成功しました。敵の数十機の機関砲も機銃弾も我らに当たる事なく、敵機を確実に撃墜、炎上したもの十五機以上でした。自分は、武者振り付いて発砲した「ルイス式水冷一三・七ミリ銃」の弾丸がカーチスホークに命中して、敵機は火災を起こしながら墜落、自爆したと戦友が確認してくれました。

この空陸戦では自軍の負傷者は数人で、敵機の撃墜は十五機でした。真実、偉大なる戦果でした。現在回顧しても、「大本営の大嘘吐き」と意気天を衝くの感がありました。

小倉第百十四連隊がミートキーナで米支軍に攻撃され、必死の攻戦中、「即援軍に進め」との指令が入りました。

武器弾薬の輸送は平坦路の時は自動車、時に馬力を利用しますが、悪路、渡河、山岳等の場合は、山砲は、「六分解」して輸送します。砲身は一五〇キロあり、力自慢が二人かかり、車輪・砲

身・その他全部を臂力搬送です。弾薬手・観測・通信・徒歩小隊等全員一丸となって一致協力し難関を突破して来ました。この結びつきが戦友愛だと思いました。

「英軍の空艇兵団の有力部隊が進軍して来る。シッタンの二十八軍救出作戦に出撃せよ」と命令がきました。昭和二十年七月だったと記憶します。

全員が熱帯地方の風土病や「マラリア」に患り、加えて食糧不足で栄養失調になり、戦意・戦力は弱体化していました。

ミートキーナ守備隊の小倉第百十四連隊は、最高指揮官は水上少将閣下で「天皇陛下より与りし軍人を死地に落とし入れしは、自分の責任だ、割腹してお詫びします」と、敵の包囲されたミートキーナ守備隊で散華されました。「部下将兵は生命を全うせよ。殉死、追腹は厳に禁ず」と云われましたが、それでも以後、手榴弾や銃口を口に銜えたりして自決した軍人の数は幾百人と聴きました。

戦傷病にて収容され、自力での活力を失い戦友の足手纏いと感じたり、生きる屍の状態を清算して靖国神社の聖域に咲く桜となろうと思う心で散華した戦友。異国の地にて散華なされし多くの戦友とその状景を偲び、往時を想像するだけで、全身の血潮が逆流するようです。

勿論、自分の中隊も、中隊長以下百八十人が、停戦命令受領時は僅か十一人でした。「全軍転進せよ（退却）」の命令でイラワジ河を渡河する事には苦闘しました。それはまるで地獄絵図のごとくで、川幅千メートルを渡るため、筏に群がり、小船に満載され、途中で河に落ちたらそのまま水く屍です。戦いに敗れ、この河岸にて自決する軍人がいました。その姿を眺めて、自分は精神異常者になったようでした。

戦線にて敵弾に倒れ、生きた身体に蛆虫が這い、また呼吸が止まった瞬間に目、鼻、口に真っ

白くなる程に蛆虫が取り付くのです。

栄養失調で倒れ絶命すると、二日目には体内ガスが発生して骨と皮だけの身体が丸々と腫れて三倍位の体積となります。熱帯地方のためか、そのような遺体を幾十体も見受けましたが、茶毘にできぬまでも穴を掘って埋葬する事すらできません。彼らにも親もいるだろう、中には妻子のいる人もいるだろうに。ビルマ戦線の惨状は、体験者のみ知る悲惨な地獄絵図でした。

―人間が鬼になり、また鬼が夜叉になるのです。坦々か淡々か耽々か、はたまた潭々か。彼は言葉を続けて下さったが、眼は充血し、口角泡をなす。聞き取りの者も頭を垂れ、瞑想す。

……―

八月二十日頃でした「現地にて停戦せよ」の命令が下り、英印軍の指示にて武装解除し、メークテーラーにて収容所に入れられました。私は現地人には非道な事はしていないから、戦争裁判にて裁かれることは無かったのですが他部隊の軍人の中には戦犯者が出たそうです。勝てば官軍で、敗者は無残な裁きの場に据えられることは、人類の正義という道理からは少し逸脱していると思いました。私は収容所にて真面目に働きました。

翌年、米軍の上陸用舟艇のリバティに乗船させられ、日本の浦賀港に上陸しました。復員列車で久留米までの車窓に見える焼土と化した日本各地の様々な姿。二度と戦争はやってはいけない。勝っても罪、負けても罪、平和を喜ぶ人間の一人でも多からんことを、私は願って止みません。有難う御座いました。〔合掌〕

後記　訥弁な彼も戦場の惨劇に嗚咽された、体験者のみぞ知る状景を、五十八年経過した現在・脳裡に現れ、眼前に映るかのように話されました。

願わくば永久に平和でありますように念ずるばかりです。

公刊戦史によれば「菊兵団」三万千四百四十四人、戦没者二万三千九十四人、生還者一万一千五十一人でした。

南方の思い出

長崎県　末吉安男

私は大正十一（一九二二）年四月十日、長崎県南高来郡西有家町見岳の農家、末吉家に、男四人、女三人の長男として生を享けました。

昭和十八（一九四三）年四月十日、戦争が激しくなる中で、福岡市の旧福岡城跡にあります歩兵第一一三連隊の補充隊に召集され入隊致しました。当時は南方作戦の激化の中でありましたために一期の検閲は三ヵ月期間が普通でしたが、私達は二ヵ月に短縮されました。それだけに訓練も厳しく、毎日二列に向かい合っての対抗ビンタで叩き合いました。入隊する時から覚悟して来ましたが、軍隊生活の厳格さは予想以上でした。叩かれ、男涙を流し、二ヵ月はあっと云う間に過ぎました。

本来、長崎県人は大村市にあります歩兵第四十六連隊に入隊するのが普通でしたが、私共七人は南方作戦要員として、福岡市にあります歩兵第一一三連隊に入隊し、二ヵ月後には南方に派遣されることになりました。ニューギニア島が危うくなりましたので、多分インパール作戦に参加するのではないかとの噂がもっぱらでした。

八月十七日、博多港に各地より約千二百人位が集結し、軍用船に乗船させられ出港しました。船中はいっぱいで棚を作って二段式の応急ベッドに寝ることにしてありましたが、足を延ばしますと足と足が重なり中々眠ることができません。加えて海が荒れるのでごろごろと転んで「あ痛い、あ痛い」と叫びながら目をさます。腹は空腹でひもじくてたまりませんが、船酔いで食べたものは吐き出す。まるで生地獄のような苦しみでした。